

今回は明治時代の本校職員について述べたいと思います。

まずは英漢義塾時代の木村鋭一から。木村鋭一は明治 41（1908）年から外交官となり、大正 8 年に開かれた第一次世界大戦のパリ講和会議や、大正 10（1921）年のワシントン会議に随行して頭角を現し、大正 14（1925）年にはアジア局長となりました。そして、昭和 2（1927）年に開催された東方会議では幹事長として会議の運営にあたりました。このころ中国では、孫文（辛亥革命で有名ですよ）の立場を引き継いだ蒋介石が国民革命軍を組織し、事実上分裂していた中国を統一するために北上を開始しました。これを「北伐」といいます。当時の日本政府は中国の国内問題であるとして、対外的には干渉しないことを表明していました。しかし、中国の再統一が成功すれば、日露戦争で日本が得ていた南満州鉄道などの満州権益の返還を求められることが予想されました。当時、日本にとって満州権益抜きでの経済運営など考えられなかったのです。そこで、その善後策を協議するためにこの会議が開催されました。会議は田中義一首相兼外務大臣を始めとして中国に関係する外交官・軍人が集められましたが、その中には、在奉天総領事で戦後に首相となる吉田茂や、同じく首相となる鳩山一郎内閣書記官長（今の官房長官みたいな役職です）がいました。

木村は同年からチェコスロバキア公使となり、昭和 5（1930）年に退職後、同 7（1932）年まで南満州鉄道株式会社理事の職にありました。その後、第 2 次世界大戦勃発前夜には、風雲急を告げる中欧情勢の専門家として、雑誌「文藝春秋」に評論を寄稿したりもしています。

その木村は明治 12（1879）年生まれの島根県出身で、島根師範学校在学中に同盟休校（ストライキ）の首謀者として放校処分となりましたが、同郷の出身であった成田英漢義塾第 3 代塾長の福山亀太郎から声をかけられ、教鞭をとっていたのです。その後、本校を退職して明治 32（1899）年に第一高等学校（現東京大学教養部）に入学し、同 35（1902）年に首席で卒業、そのまま東京大学に入学して、同 39（1906）年に卒業しました。今のように、高校を卒業したら大学、大学を卒業したらすぐ就職、という時代ではなく、いろいろと試行錯誤しながら進路を決めることができた時代だったのです。

成田英漢義塾から成田尋常中学校に移行した明治 31（1898）年には、東京帝国大学大学院で酵母生理について研究していた乾環が採用されました。本校にはわずかな期間しかいませんでしたが、退職後の明治 34（1901）年には「琉球泡盛酒発酵菌調査報告」（『醸造雑誌』301 号）を発表したことから、沖縄の代表的なお酒である泡盛の醸造に必要な黒麹菌の発見者とされています。

ユニークな人物としては、成田中学校の校長であった竹内楠三がいます。竹内は明治 32 年 4 月に校長職を辞任した喜田貞吉のあと、8 月から校長に就任しました。ちなみに、喜田貞吉は本校退職後、京都帝国大学教授として、特に日本古代史研究で優れた業績を残した、大変高名な歴史学者となります。さて、竹内校長ですが、当時まだ誕生したばかりの心理学を研究し、本校退職後は前成田中学校校長の肩書きで『近世天眼通実験研究』のような、いわゆる超常現象を科学的に解明しようとする著作を数多く発表しました。その他、『実用催眠学』がベストセラーとなり、当時催眠術ブームが起こりました。

竹内校長の著作は、著作権が消滅したこともあり、国立国会図書館のホームページで読むことができますので、見てみるといいでしょう。学術書として読むのではなく、当時の出版文化がもたらした時代の雰囲気を感じ取ることを目的に読むと、なかなか面白い本ですよ。

次に鈴木三重吉についてお話ししましょう。

鈴木三重吉は、明治 15 (1882) 年に生まれ、夏目漱石の門下となり、児童文学雑誌「赤い鳥」の創刊につくした人物です。明治 34 (1901) 年に第三高等学校を経て東京帝国大学英文学科に入学、休学中の明治 39 (1906) 年に初めての作品『千鳥』を完成させました。明治 41 (1908) 年に東京帝国大学を卒業した鈴木は、その年の 10 月に教頭として赴任しました。新卒でいきなり教頭とは、今では考えられないですよ。当時は大学といったら、今でいう旧帝大しかなく、大卒者に授与される学位である「学士」の社会的地位は高いものでした。

鈴木教頭は教頭職としての職務に加えて、週 15 時間の授業を受け持っていました。住まいは、成田町の田中屋・黒川方・吾妻屋と移って、3 月には町から 15・6 町 (大体 280 メートルほど) の場所にあった一軒家に住んだ、ということです。山の中だったということなので、今の野球グラウンド近くかな、と思われそうです。やがて、物騒だということで町中の 5 円 50 銭の借家に住むようになりました。鈴木教頭の年俸は 800 円であったので、月当たりになると 67 円となります。明治 30 年の小学校の教員や警察官の初任給は月に 8～9 円で、1 人前の大工さんや工場の技術者だと月 20 円、そう考えると 1 円は今の 2 万円位になるそうです。明治 32 年のアメリカ製の自転車は 200～250 円 (当時の給料で 1 年分)、野球のグローブが 1～2 円です (ホームページ『man@bow』より)。ある試算では、明治 40 年の 1 万円は平成 10 年の 1,088 万円とのこと。そう考えると鈴木教頭は破格の扱いでしたが、弟と東京の家に仕送りをしていたために、手元にはあまりお金が残らず、生活は苦しかったそうです。

鈴木教頭は、明治 43 (1910) 年 3 月から国民新聞に長編小説『小鳥の巣』を連載を始めました。連載が始まると、午後 4 時までの勤務は負担だったようで、石川校主兼校長に辞職願を出しましたが、引き止められた上に、5 月 4 日から休職扱いとなり、成田図書館 (今の成田山仏教図書館です) にこもって執筆に集中し、9 月 1 日から復職しました。この時の石川校主兼校長に対する感謝の念を、鈴木教頭は生涯忘れることはなかったといいます。その後も在職中に『黒髪』『文鳥』『子猫』などの作品を発表して文学活動を精力的に展開しました。鈴木三重吉といえば、雑誌「赤い鳥」が有名です。「赤い鳥」は大正 7 (1918) 年に創刊され、芥川龍之介の『蜘蛛の糸』『杜子春』、新見南吉の『ゴン狐』といった、皆さんもよく知っている作品が掲載された、歴史に残る児童文学雑誌です。昭和 11 (1936) 年に鈴木は 57 歳の若さで他界しましたが、それと同時に「赤い鳥」も廃刊となりました。

鈴木教頭の授業は厳しいもので、落第生が多かったようです。そのため、生徒の反感を買うことが多く、明治 44 (1911) 年 1 月 19 日に生徒によるストライキ (集団で授業拒否すること。よい子はまねをしてはいけません。) が起こりました。前日から最上級生の 5 年生全員が欠席していましたが、これに呼応するように 2 年生から 4 年生までの生徒が、2 時間目から無断で校門を退出したのです。これについて、鈴木教頭は 1 月 21 日付の書簡 (『鈴木三重吉全集』第 6 巻) の中で「さてこつちは学校にストライキをやり出し、二年組以上一昨日より同盟休校してゐる。原因は五年に三四人、小生の点の零なるも

のあり、ヤケで以て五年を煽動し採点の不当をならすのだ。さうして小生等四人の教員を出さうといふのだ」と述べています。鈴木教頭が5年生の生徒3・4人に対して0点を付けたのに対して、鈴木教頭を含む4人の教師の排斥を要求した5年生が、一斉に休んだことがきっかけであったことがわかります。20・21両日は1年生以外は数人が出席しただけでした。22日は日曜日でしたが、職員は出向して校長室で会議を開き、ストライキの収拾に向けて対応を協議しました。23日になると、保護者代表の仲裁により生徒たちは午後3時半頃に玄関前に集まり、葛原運次郎校務主監（校長代理のことです）との話し合いがなされました。24・25両日は臨時休校とし、26日から授業を再開しました。27日に葛原校務主監がストライキに参加した2年生以上の生徒に対して訓話をし、生徒が謝罪した上で退学願いを出していた首謀者の生徒が学校を続けられるようになり、ストライキは収まりました。これに関連して、鈴木教頭の師である夏目漱石は、2月1日の書簡（『夏目漱石全集』第23巻）で次のように述べています。

新年早々ストライキがあった由学校の教師をすれば是から同様の事が何度となく起こるものと思はなければなるまい。今は世の中の門口を潜つた許りだ。第一の経験として興味のある事件と思ひ給へ。和尚さんが君を辞職させないのは好む。生徒を罰しないのも好む。君も平気で居れ。

このような漱石の励ましもありましたが、すっかり嫌気がさしたのか、鈴木教頭は辞職を願い出て、4月1日付で退職しました。学校は鈴木教頭の退職に当たって慰労金として120円を支給しました。

そのあとを受けて教頭になったのが、青木健作でした。青木健作は明治42（1909）年11月11日に、鈴木三重吉と同様に英語の教師として赴任しました。青木は明治16（1883）年に山口県で生まれ、同41年に東京帝国大学を卒業しました。鈴木三重吉も同じ年に卒業していますが、鈴木は年齢でいえば青木の一つ上で、在学中に1年間病気のために休学していることもあって、面識はありませんでした。

このころの事情については随筆『椎の実』で次のように描かれています。

明治四十三年十一月のある日、ネクタイの結び方も知らない私が、東京から北へは一步も踏み出したことのない私が、初めて上野から成田行きの、煤けた汽車に乗って、暗いやうな心細い気持で、一人の知人もない成田へ赴任した夕方、初対面ながら直ぐ下宿のことなど世話をしてくれたのは鈴木だった。

当時成田中学校は主監（校長代理）の葛原さんが三十、教頭の鈴木が二十八、国語の塚田君が二十七、数学の山下君、林君などは二十三四というふやうに若手ぞろいで、教室でも運動場でも元気が横溢してゐた。若い私は間もなく此の新鮮な気分と同化して明るい日々を送るやうになつた。別けても鈴木とは最も頻々に往来し、町の料亭へも屢々二人で行くやうになり、学校でも弁当のおかずを互に突き合ふほどになつた。

この文を読むと、鈴木教頭と青木との交流の深さが想像できると同時に、本校の当時ののんびりとした様子がうかがえます。その後、青木が明治43（1910）年に発表した『虻』が夏目漱石に評価され、その他『お絹』『残骸』などの作品を在職中に発表しました。そして、鈴木教頭が退職した明治44年4月から、教頭になりました。この時の月給が53円でした。

青木教頭は修身の授業を担当していました。今は修身の授業はありません。アジア・太平洋戦争中の

行き過ぎた国家主義教育への反省から、戦後に廃止されました。2年生の1学期試験問題は次のようなものでした。

一雨だれ石をうがつのたとへに就いて述ぶべし

二自修するに心得べききことを問ふ。自分のこれまでなしたる点を述べよ

いわゆる「点滴石をうがつ」の例えについて説明することと、「自修」つまり独学をする時に気を付けることを述べるわけですが、どうでしょう。2年生というと今の中学2年生です。皆さんは答えられますか。昔はこんなことをやっていたのですね。

青木教頭（在職中に井本姓に）は大正4（1915）年3月26日に依願退職しますが、その前日に月給を60円から65円に上げています。何とか引き止めようとしたのですが、創作活動に専念したいとの気持ちが強かったのでしょう。そのまま退職します。その後、青木健作は文学活動とともに、法政大学教授として教壇に立ち続けました。昭和39（1964）年12月に81歳で他界しましたが、それ以前の同32（1957）年11月に教え子によって本校内に句碑が建てられました。句碑には、「宿借るや 更けて鴨啼く いんば沼 健作」と刻まれています。この句碑は、今生徒の皆さんが登校してくると、校門を潜り抜けた左側にひっそりと立っています。どうか、これからはこのような石碑にも注目してみてください。意外な歴史を知るチャンスかもしれません。



今回はここまでとします。

（深田富佐夫）